

議会

No.205



自然劇場

議会に対するご意見
をお聞かせください。

お電話の場合

☎ 82-3111 (内線 150 番)

E-mailの場合

gikai@vill.kijimadaira.lg.jp

発行：木島平村議会
編集：議会だより編集委員会

平成29年度木島平村議会 国内視察研修

日程 10月18日～20日
視察先 滋賀県米原市
東近江市
京都府京都市

報告 土屋喜久夫

全議員を対象とした国内視察研修を、農繁期が終わる10月18日から20日までの期間で実施した。

議員資質の向上を目指し、2年前から、県町村議長会主催の研修、議員個々が自らの課題とする事柄について個別に進める研修も予算化をしてきた。なお、今回の視察研修の経費は、議員報酬からの積立てと、上限2万5千円（一人当たり年額）の村からの旅費を充てている。

今回は、入り込み客が常に右肩上がりの奥伊吹スキー場、注目度の大きいグラマラスキャンプ（グランピング）の体験と指定管理者制度による振興策、スモールタウンの包括福祉の実態、直売所が主体となった農業振興策、民間主導の京都市の観光施策の実態とインバウンドの実態を調査した。

奥伊吹スキー場

滋賀県米原市奥伊吹スキー場は、大和伝説の伊吹山の北斜面を使い、標高700～800mの国有林と地元財産管理区所有地をゲレンデとし、スキーリフト9基のスキー場でファミリーをターゲットとするなど、木島平スキー場と共通点があるが、宿泊施設が無く、日帰り専用ゲレンデでの経営である。経営主体は土木事業を主体とする民間事業者であるが、先々代を創業者とする同族企業でもある。グループ全体の売り上げは、年間15億円。内スキー場が10億円となっている。経営は、徹底した合理化を進めており、社員も建設会社の30人を中心に季節的なアルバイト、パート、派遣社員も活用している。冬期従業員150人をマネジメントしている。

国道からスキー場までの約20kmの除雪も受託しており、スキー場開場までの除雪体制を組み、圧雪車3台に対し3人のオペレーターを配し、圧雪作業終了後は、スキーパトロール、スキー学校に従事するなど、徹底したその道のプロフェッショナルの育成と活用でスキー場イメージを作っている。スキーリフトのメンテナンスも社



奥伊吹スキー場センターハウス

員で行い、視察時も動線の悪いリフトの切り縮めの工事が行われており、大半が直営の工事として行われていた。

リフト券もICカードが導入されており、当初のリフト券印刷代と比べ、単

価的に10倍となるが、繰り返しの利用と導入枚数が少なくなる事、顔認証で転売防止になる事、更に現代スキーヤーの人と顔を合わせないニーズに合致した取り組みで、入り込みを増加させる一因となっている。また、リフト従事者も1基当たり4人配置となり、人件費を抑制し、経常経費の削減に

なっている。除雪機や降雪機、他の設備は、最新のものを導入し、比率の高い人件費の抑制に意を用いている。正社員は、フルシーズン220時間の残業にもなり、100万円を超える給与となるが、プロフェッショナルなサービスを提供できる要因ともなっている。

スキー場内の設備もファミリーを意識した内容で、主導権を握る女性の目線で整備され、トイレは高速道路のインターチェンジのトイレを超えるデラックスさで、パウダールームも備え、全面ミラーの手洗い、車イスの利用が可能な個室の広さを保っている。

フードコートは、三箇所に分かれ、1200席が整備されている。最大の日入り込みが6000人の実績があり、5回転が必要となる。実績は、ICリフト券の活用で瞬時に積算可能である。

岐阜県と接する地域であり、伊吹山を超えると空っ風になる木島平村と同様の気象状況でも、南に位置し、降雪が心配されるが、最新鋭の降雪機の導入によりプラス2℃でも人工雪を降らせる事が可能である。13基が稼働しており、多くの導入実績からメーカーからの試験貸与などもあり、地元気象状況を勘案した開発も可能である。この降雪機は、社長自らが担当であり、スキー場の基本的条件である雪の確保を責任者自らの業務としている事に常に右肩上がりの秘訣を見た思いがある。

グランピング



グランピングテント

人工池の三島池周辺に、宿泊保養施設、食堂、コテージ、キャンプ場、運動施設などを配した「グリーンパーク山東」の指定管理者として、スキー場を運営する奥伊吹観光(株)が年間1890万円で運営をしている。単に施設の運営だけでなく、指定管理者の提案で、稼働率の悪いゴルフ場を時代のニーズにあったグランピング施設に転換し、注目を集めている。手ぶらで自然体験と贅沢な時間を過ごすことのできるグランピングは、都市近郊で注目を集め、レギュラーシーズンで、2食付ひとり1万円台後半から2万円台の高価な宿泊費に比して、稼働率は週末を中心に100%を誇り、私たちの滞在した平日にも4組程度の利用があった。テント張りが5棟、ウッドキャビンが5棟で、2食とも、スタッフがその場での調理をサービスしてくれ、さながら豪華なバーベキューを楽しむことができる。あいにくの雨

であつたが、テントに当たると雨音は、自然の中を実感することができる。提供する側の認識でなく、このような顧客側のニーズを把握することで、右肩上がりの成績を

残せる経営があつた。

グリーンパーク山東の一角にありながら、別世界を演出しているアイデアは参考に値する。更に、稼働率の低い保養施設も、指定管理者の費用で新たに温泉施設に変えたいとの意向を米原市と進めているとのことである。地域に根差した指定管理者であることの強みであり、同様のことが、本村でなぜできないか、提言のみでなく、人材の育成の重要性を感じた。

あいとうふくしモール

東近江市愛東地区(旧愛東町)で「地域から医療福祉を考える懇話会」の委員から地域の安心・安全の拠点づくりとして「福祉モール」構想が生まれ、発展したもの。行政主体ではなく関係者の自主的な活動から展開され、現在、NPO法人結の家(高齢者支援)、NPO法人あいとう和楽(障害者支援)、(株)あいとうふるさと工房(福祉支援型農家レストラン)の3事業所からなる施設運営がされている。基本的な考え方は、「私たちの生活は自らを守る精神」であり、これからの地域運営・自律に必須なことと感

じた。



障害者就労の
あいとう和楽の田園カフェ

道の駅あいとう

マーガレットステーション

財団法人愛の田園振興公社を運営母体に、東近江市愛東地区の農業の振興を図っている。京都まで1時間、大阪2時間、名古屋2時間の時間距離はあるが、他の地域に通過する立地でなく、そこを目指す必要のある場所にある。



道の駅あいとうマーガレット
ステーション

コンセプトは、「東近江産農産物と圧倒的な品ぞろえの両立」「買い物だけではない楽しさ・思い出を創る」「変化する季節・田舎の風景を伝える」であり、集客範囲の拡大、滞在時間の延長、メディアの活用とリピーターの獲得など戦略的な運営がなされている。農家にある農産物の販売でなく、売れる農産物の栽培指導まで直売所が行い、農家経済を支えている。農林資金を活用した箱モノを多く管理しているが、商品開発の場の提供や、端境期を見越したドライフラワーの生産やショップ、体験工房など、コンセプトに沿った活用がなされており、管理責任者が、流通業界から転職され、ここでも人材の重要性を感じた。

京都市

时期的に小中学校の修学旅行と重なり、平日とはいえ交通渋滞が常態化しており、多くの見学ができずに、帰路となった。日本を代表する観光地であり、外国語表記の案内が当然のごとくあり、本村が観光計画の中にうたう、インバウンドを目指す村内案内の実現の可能性はいかなるのか不安がよぎる。

本村は、北陸新幹線と北陸線の特急列車を乗り継ぐことで、京都への旅程時間4時間であり、京都観光後の、日本の田舎体験、農村景観も充分、資源として活用できるものではないかと思われた。村への導線と宣伝をどのように進めるか課題である。

《まとめ》

議会の機能は、行政のチェックであり、自ら予算を持たないため、議会活動を通じて行政への提案に留まってしまう。この研修のみでなく、公費をいただいた研修を、どのように自らのものとし、村の発展のため提言することができるか、真価が問われるものである。

他の議員の報告は、議会事務局で
閲覧できます。